

うちのみこう

内海港（県管理地方港湾）

内海港は小豆島東部、観光と産業の町として知られる内海町の表玄関です。

本港は、背後に紅葉の名所として名高い寒霞渓を控え、前面は小説「二十四の瞳」の舞台、岬の分教場のある田ノ浦半島で囲まれた、美しく懐の深い内海湾を港湾区域とし、西は三都半島で風波を防ぐ天然の良港であり、商港、観光港、工業港としての機能のほか、本港南の海上が、備讃瀬戸航路として大型船が行き交うことから、荒天時の避難港としても重要な役割を果たしています。

本港の港としての歴史は古く、日本書紀によれば、その昔、応神天皇ご遊幸の際、草壁の港（現在の内海港草壁地区）に船をつけ、そこから寒霞渓に登られたと伝えられています。

また、本港背後地域の伝統的産業である醤油造りは江戸時代後期に始まり、明治以降、本格的に工業化し、現在では日本三大産地のひとつとなっているほか、昭和に入っては、これを利用した佃煮の生産も始まり、現在では特にコンブの佃煮については日本一の生産地となっており、港にはこれらの地場産業に関連した多くの船が出入りしています。

本港の整備は明治 35 年、三好平三郎氏が私費を持って改修に着手したことに始まり、以後数次の改修を経て、昭和 45 年には本港と高松を結ぶフェリーも就航し、観光、物流に大きく寄与しています。また平成 4 年には苗羽地区において港湾改修事業に着手する一方、平成 9 年からは草壁地区で廃棄物処理事業に着手するなど新たな港湾整備を進めています。港の北岸には美しい海辺も広がり、その環境整備も逐次進められ、夏には海水浴、ウィンドサーフィンのメッカとしても有名になりつつあり、伝統産業と新しい観光、リゾート等が調和した、地域の交流拠点として、今後の発展が期待されています。

